

の

野(名)
篋(名)
幅(名)

の
(後)

舌音にして單子音の一つ。

廣々としたる草原。

矢竹。●矢。

布の略音。●普通の織物の横幅。●一は、

○散木「五月雨の晴れせぬ頃は引き曝す瀧

の白布幾幅添ふらん」

「一」名詞と名詞を結び付くる詞。○「松の

枝」「日本の山」「二」名詞の下に置きて其動

詞形容詞の主たる位を示す詞。●かに同じ。

○「鶯の鳴く」「人の戀しき」「三」形容詞の語

尾の代りに置きて感嘆の意をあらはす時に

用ふ。○「あらおもしろい歌の心や」「四」名

詞またに他の形容詞の下に置きて形容詞を

形づくらしむ。○「おぼろの月」「潔白の身」

「五」動詞と名詞を結び付くる詞。○「兩雄相

闘ふの圖」「六」句と動詞を結び付くる詞。

○「忘れじのゆくすゑまでは難ければ(七)

なからの意。●なれどももの意。○源氏「み

だりがはしき事のさすがに目さめて」「(八)

のいずみ

の如くの意○新古今「葦鴨の羽風になびく
浮草の定めなき世を誰かたのまん」
肉刺(名) 靴すれなどにて指の間に出來た
る豆。(和名抄)

のろふ

呪(他動四段) 他人に災あらしめんさて神佛に
祈る。●呪呪する。

のろま

(名) 物事に遲鈍なる事。又其人。

のろし

狼烟(名) 「一」烽火に同じ。「二」合圖の爲に打
上ぐる一種の烟。火花の類。

のろし

(形。形狀言ク活) 遲鈍なる有様●色情に溺れ
易き有様

のばかま

野袴(名) 袴の一種。裾に廣き縁ありて昔し
士人の旅行する時着せしもの。

のばす

伸延(他動四段) のびさする。●のぶるやうに
する。

のぼり

幟(名) 布または紙の上を横さに乳を附け豎に
竿に通したる一種の旗。

のぼり

登(上)(名) 「一」登る事。「二」登り坂。「三」皇都
の地方へ向ひて行く道。○「上り瀧車」

のぼりよう

登龍(名) 模様の名。龍の上に向ひて昇る
形。

のほりがく

昇樂(名) 雅樂にいふ詞。法會にて導師の

講座に昇る時奏する音楽。

のほりしほ

上汐(名) 上げ汐。●満ち汐。

のぼる

登。上。昇(自動四段) 「一」高き處に進む。●上

手の方に行く。●あがる。「二」上京する。

のぼきり

鋸(名) のこきりに同じ。(和名抄)

のぼせ

登。上。逆上。

のぼす

登。上(他動四段、又下二段) のぼらしむる。

のぼす

(自動下二段) 逆上する。

のべ

野邊(名) 野に同じ。

のべおくり

野邊送(名) 屍體を野邊に送る事。●葬送。

●葬式。

のべがね

延金(名) 薄く延べたる金属。

のべつ

(名) 引き續きて切れ目の無き事。△(形)一の

べつな。(副)一のべつに。(俗)

のべぞう

延棒(名) 三味線にいふ詞。繼棒ならぬ棒。

のど

祝詞(名) のりとの略。(宇治)

のど

咽。喉(名) 食道と氣道との入口。●のんど。

のどに

(副) 長閑に。●ゆつくりと。●ゆつたりと。

○續紀宣命「海行かば水漬く屍。山行かば草むす屍。大君の邊にこそ死なめ。のどに

のどぼけ

は死なじし 喉佛(名) 氣管の一部。頸の前方に高まり

て見ゆる所。

のどり

荷取(名) 荷を持つ人夫。●荷持。(紀)

のどわ

喉輪(名) 甲胃の時。喉に當つる半月形の物。(圖)

のどか

長閑(名) 心の靜に落附きたる有様。●氣の長き有様。●

ゆつくりしたる事。●ゆつたりしたる事。

●春の日の暮れがたき有様。△(形)一のど

かなる。(副)一のどかに。

のどがなへ

能登鼎(名) 能登の國名産の鼎。(堤中納言

物語)

のどよび

(自動四段) 咽聲に呼ぶ。●咽び叫ぶ。●悲

しみ叫ぶ。○萬葉「ぬえ鳥ののどよび居るに」

のどむ

(他動下二段) のどかにする。

のどめ

(副) のどかに同じ。○和泉式部日記「うつろはぬ常盤の山も紅葉せばいざかしゆきてのどめと見えん」

のど

喉頭(名) 頸の前方。

のど

のど

のど

のど



のちやか

のちかに同じ。(形)―のちやかなる。(副)―
のちやちに。……(雅)

のちまる

(自動四段) のちになる。

のちけし

長閑(形。形状言ク活) のちかなる有様。

のちぶえ

喉笛(名) 氣管。●氣道。

のち

後(名) 「一」次ぎ。●あさ。●うしろ。●末。●
未來。「二」死にたる跡。「三」子孫。●末裔。

のち

野路(名) 野中にある道。

のちおひ

後生(名) 後に生るゝ人。(空穗)

のちぞひ

後添(名) 後に添ひたる妻又は夫。●後妻。

のちらか

のちかに同じ。(形)―のちらかなる。(副)―
のちらかに。……(雅)

のちのわざ

(名) 人の死後に営む佛事。●七月七日の
法事。

のちのよ

後世(名) 「一」後年。●將來。●死後。「二」
死後に到る世の中。……地獄極樂の類。●來
世。

のちのつき

後月(名) 太陰曆九月十三夜の月。

のちさん

後産(名) 胞。●後の物。

のちせ

後瀬(名) 後の時。○源氏「後瀬を契りて出て

のり

海苔(名) 水草の一種。水中の木石などに附く緑
色なるもの。多くは紙の如く漉きて食用さ
す。

のり

糊(名) 物を貼り附くるに用ふる粘りたるもの。
米の粉又は生麩などにて造る。

のり

法度。規則(名) 「一」政府にて定めたる法則。●
法律。●法令。「二」物事の法則。●規則。

のり

「三」佛の立てたる法則。●佛法。●佛道。
血。○「刀のりを拭ふ」

のり

(名) 調子に乗る事。(俗)

のり

糊入(名) 紙の名。杉原紙の一種にして糊氣
の強きもの。

のり

祝詞(名) のりさこに同じ。

のり

則(自動四段) 手本にする。●模範にする。

のり

乗取(他動四段) 敵地に入りて其場所を
占領する。

のり

祝詞言。諄辭(名) 宣説言の意。○神に告ぐ
る詞。●祭文。●祓の詞。

のり

乗地(名) 「一」謡曲などの雨垂拍子にて謠ふさ
ころ。「二」物事の調子に乗りて氣の進む

のり

のりさこに同じ。

のり

手本にする。●模範にする。

のり

敵地に入りて其場所を
占領する。

のり

祝詞言。諄辭(名) 宣説言の意。○神に告ぐ
る詞。●祭文。●祓の詞。

のり

乗地(名) 「一」謡曲などの雨垂拍子にて謠ふさ
ころ。「二」物事の調子に乗りて氣の進む

のり

のりさこに同じ。

事。

のりがへ^エ

乗替(名)

「一」或る車、馬又は船より下りて

他の車、馬又は船に乗る事。「二」破損等の豫備として設け置く取替用の車又は馬。「三」

昔し陣中にて大將の乗替の馬を預りて乗り居る役の侍。○盛衰記「のりがへなつかひ」

のりかけ

乗掛(名)

馬の積荷を幾分か減じて人一人其上に乗る事。

のりたまはく^セ

宣(副)

宣ふには。●宣ふやう。

のりたまふ^セ

宣(自動四段)

言ひ給ふ。●告げ給ふ。

のりつけ

糊附(名)

糊にて密着さする事。

のりうち

乗打(名)

乗物の儘打過ぐる事。

のりうつる

乗移(自動四段)

神佛又は生靈死靈などの人に附く。

のりのはな

(名)

はつけ

法華の文字の直譯。◎法華經。●法

のりのはし

(名)

はつけ

法橋の文字の直譯。(今物語)

のりのは

法庭。法場(名)

佛事を行ふ場所。(拾玉集)

のりのつかさ

式部省(名)

しきぶしやう。(和名抄)

のりのうきさ

法浮木(名)

浮木の龜を見よ。

のりのやま

法山(名)

釋迦の佛法を説きたる靈鷲山。

のりのふね

法船(名)

ちかひのふねを見よ。

のりのころも

法衣(名)

僧の着る衣。●法服。

のりのあめ

法雨(名)

いちみのあめを見よ。

のりのし

法師(名)

法師。●僧侶。

のりのすべらき

(名)

法皇の文字の直譯。◎出家し給

ひし上皇。○千載序「我のりのすべらきに

仕へ奉りては」

のりあひひ

乗合(名)

多人數乗り合はす事。又は乗り

合ひたる人。

のりまき

海苔卷(名)

食品の名。飯を海苔にて巻き輪

切にしたるもの。

のりこぼる

(自動下二段)

「一」人多くしてこぼるゝ程

の有様にて乗車する。「二」衣服などの外に

もこぼれ出づるやうにして乗車する。

のりごと

宣言(名)

「一」祝詞言に同じ。「二」仰せ。

のりごと

詔(他動四段)

宣言すの約音。◎宣ふ。●詔

する。(古)

のりゆみ

賭弓(名)

正月十八日に天皇弓塲殿に御して

左右近衛兵衛の舍人に弓を射させ勝負させ

て御覽する事。中古時代定例として此儀式

行はれたり。

のりじり

乗尻(名) 競馬の乗手。○空穂「左の乗尻は

右近のせうより始めて」

のりもの

乗物(名) 「一」人の乗りて行くものの總名。

車、馬、舟、駕籠の類。「二」駕籠に同じ。

のりもの

賭物(名) 總て勝負事に賭くる物。●かけ

の、○空穂「上。碁盤をめぐして仲忠とあそぶ。何なのりものにはせん。いさせちならんものもかけし」

のる

乗(自動四段) 「一」馬、車、輿、駕籠、舟などの上に

あがる。●すべて物の上にあがる。「二」勢

に乗じて物事の進む。●音楽の拍子につれて舉動の進む。●乗する。「三」書物などに

書かる。●記載せらる。い。

のる

属(他動四段) のいしるに同じ。●属言する。

のる

宣。告(他動四段) 言ふ。●告ぐる。●言ひ聞か

する。●宣言する。

のる

(自動四段) 反るの反對。身を伸ばして前に屈む。

のわき

野分(名) 秋の半頃より末にかけて吹く大風。

●あらし。◎野の花を吹き分け荒らすの意。

のわきたつ

野分立(自動四段) 野分らしく見えて吹き

のがひ

野飼(名) 起る。(源氏) 牛馬などを野山に放ち飼ふ事。●放

ち飼。

のがる

遁。逃(他動下二段) 「一」逃ぐる。●逃げ去る。

のがふ

野飼(他動四段) 野飼にする。●放ち飼ふ。

○後拾遺「野飼はれど荒れゆく駒をいかにせん森の下草さかりならねば」

のかせ

野風(名) 野を吹き渡る風。

のがす

逃(他動四段) 逃げしむる。●にがす。●遁れ

のたち

野太刀(名) 野太刀といふ名稱には三度の變化

あり。「一」短刀。(和名抄)「二」束帶の時に佩く太刀の總名。……衛府の太刀も之に屬

す。「三」殊に長大なるを云ふ。

(自動下二段)

這ふ。●のたくり行く。

(名)

往來などに倒れて死ぬる事。

(自動四段)

伸び立つ。●生長する。●立身出

世する。

のたうつ

(自動四段) めたうつに同じ。●のたくる。

のたくる

(自動四段) 這ひまばる。●のたうつ。●ぬ

たうつ。

のたまは^{リク}

(副) 宣ふにけ。●宣ふやう。

のたまふ^{モツ}

宣(他動四段) のりたまふに同じ。

のれん

暖簾(名) のうれんに同じ。商家の軒に掲ぐる

幕の如きもの。

のぞむ

望(他動四段) 「一」此くあれかしと思ふ。●欲

する。●希望する。●所望する。「二」遠く

より見る。●見渡す。

のぞむ

臨(自動四段) 「一」下に見おろす。●差し掛か

る。●面する。○「山を負ひ河に臨む」「二」其

場に足踏み掛くる。●到る。○「大事に臨む」

「席に臨む」

のぞく

除(他動四段) はぶく。●のける。●去る。

のぞく

視(他動四段) 透見する。●かいまみる。●窺

ふ。

のぞく

(自動四段) 臨む。○中務集「池にのぞきたる

松に藤かゝれり」

のぞまし

望(形。形状言シク活) 望むべき有様。●希望

せらるゝ有様。

のぞき

観(名) 観世物の一種。匣に繪を入れて眼鏡よ

り覗き見るやうにしたるもの。

のぞみ

望(名) 「一」望む事。●所望。●希望。●願。

「二」なぐめ。●眺望。

のぞ

祝詞(名) のりさのりさここに同じ。

のぞる

乗取(他動四段) 乗り取るに同じ。●占領する。

のぞる

則(自動四段) のりさるに同じ。●手本とする。

●模範とする。

のづち

野槌(名) 獸の名。但し實物は詳ならず。○沙

石集「一人化界して夢に告げていはく。我

は野槌といふ物に生れたりといふ。野槌と

いふは常にも無き獸なり。深山の中に稀に

あるといへり。形大にして目鼻手足もなし。

只口ばかりあるものにて人を取りて食ふと

いへり」

のづかさ

野司(名) 野の高き處。○萬葉「足引の山谷

こえて野司に今は鳴くらん鶯の聲」

のづら

野面(名) 「一」野の面。●野。「二」のづら石に

同じ。

のづらいし

野面石(名) 山野より切り出だしたる肌の

儘の石。……石碎なごに用ふ。

のなか

野中(名) 野原の中央。

(名) のらものと同じ。○「のらの節句働き」

のら (名) 野に同じ。

のらかせ (名) 野風に同じ。○好忠集「獨寐る我身は荒れて草村の野ら風よりも寒くもあるか」

な (名) 豌豆の古名。(和名抄)

のらまめ (名) 野佳(名) 草の名。紫蘇に同じ。(和名抄)

のらえ (名) のらくらと遊び居る人。●情け者。

のらもの (名) 飲。香(他動四段) 「一」水、酒、煙草の類を口より

のむ (名) 喉に入る。●「二」物を嚙まずして喉に入る

い。

のむ (名) 祈(他動四段) 祈る。●乞ふ。●願ふ。(古)

のんど (名) 飲處の意。◎のど。●咽喉。

のう (名) 農(名) 耕作、養蠶、牧畜等を爲す事。又は之を業

とする人。●百姓。

のう (名) 臍物より出づる汁。●うみ。

のう (名) 能(名) 「一」藝。●腕。●技倆。「二」効能。●さ

いめ。「三」歌舞の一種。田樂能、猿樂能、幸

若能の類の總名。「四」特には能樂。

のう (名) 腦(名) 腦髓に同じ。

し。●これ。○諸曲「のう其衣はこな

なふりやう (名) たのにて候。何しにめされ候ふぞ」

涼(名) 納涼(名) 涼み。●避暑。△(動) 納

のうりき (名) 能力(名) 其事を爲し能ふ力。

のうりき (名) 能力(名) 寺に仕へて力役を爲す男。●寺男。

のうりききん (名) 能力頭巾(名) 能樂にて

能力演者の着用する頭巾。

〔圖〕

のうか (名) 農家(名) 農を業とする家。●百

姓屋。

なうがい (名) 腦蓋(名) 腦を保護する骨の名。●頭骨。●

頭蓋骨。

のうがく (名) 農學(名) 農業に關する事を研究する學問。

能樂(名) 歌舞の一種。足利義滿の頃に大成

し。徳川幕府の式樂に爲りて武家の間に大に

行はれたるもの。流派は觀世(初は結崎と

稱す)寶生(初は外山)金春(初は圓満井)

金剛(初は坂戸)喜多の五家あり。樂器は横

笛、小鼓、大鼓、太鼓の四種を用ひ。諸曲の拍

子を取りて之を奏す。

のうがき (名) 能書(名) 賣藥などの機能を記したる書付。



のうたいふ

能太夫(名) 能樂の演者。●シテ。

のうれん

暖簾(名) 商家に掲ぐる幕の如き垂布。●のれん。

なふそり

納蘇利(名) 雅樂の曲名。●なつそり。●なすり。

のうのう

(感) のうを重ねたる詞。○謡曲「のうく」暫く。

のうぐ

農具(名) 農業に用ふる道具の總名。能管(名) 能笛に同じ。

なふぐん

納棺(名) 屍骸を棺に納むる事。△(動) 納棺す。

のうしま

野馬(名) 野山に放ち飼ふ馬。腦膜(名) 腦髓を包む膜。

のうげ

能化(名) 能く衆生を教化する事。又は其佛および人。○「六道能化の地藏尊」(佛教)

のうぶたい

能舞臺(名) 能樂を演ずる舞臺。能笛(名) 能樂に用ふる横笛。

のうぶえ

納言(名) 納言官。すなはち大納言、中納言、少納言の總稱。

なうてん

腦天(名) 頭の頂。

農業(名) 農の業務。●農の職業。●農

のうげ

事。

のうめん

能面(名) 能樂に用ふる假面。

なうみそ

腦漿(名) 腦髓に同じ。農事(名) 農業に關する一切の事。●農の仕事。

のうじ

●農業。

のうじ

農時(名) 農業の多忙なる季節。植付、刈入の時。類。

のうし

能書(名) 書をよくかく事。又は其人。●能筆。能書(名) のうしに同じ。

のうし

能者(名) 藝能をよくする人。●藝人。○盛衰「三位の中將は無雙の能者にておぼしますなり」

なふじ

納受(名) 「一」品物を受取る事。●受納。「二」祈願の筋を神佛の聞き入れ給ふ事。…△(動) 納受す。

なうじゅうけつ

腦充血(名) 病の名。血液の一時に腦に集まりて感覺を失ふもの。

なうびやじう

腦病(名) 病の名。腦一切の病。能筆(名) 書をよくかく事。又は其人。●能書。

のうみつ

のうせんかつら

凌霄花(名) 灌木の名。蔓生にして黄

なる朝顔なりの花咲くもの。

なうす

脳髓(名) 頭骨内に位する白色柔軟の大塊に

して神経の本源たるもの。

ののめく

(自動四段) のいしるに同じ。高聲に騒ぐ。

のみや

野宮(名) 皇女の齋宮又は齋院に立ち給ふ時

先づ籠りて潔齋し給ふ所。齋宮のは北嵯峨に。齋院のは紫野にあり。

ののしる

罵(他動四段) わめきたてゝ人を辱むる。●

惡口する。●罵詈する。●のる。

ののしる

(自動四段) 高聲にて物言ひ騒ぐ。●わめく。

●ののめく。

のく

退(自動四段) 其場を去る。●立ちしりぞく。

のく

除(他動下二段) のぞく。●はぶく。●さりのく

のぐさ

野草(名) 野の草。

のや

野矢(名) 鹿獵に用ふる矢。

のま

野馬(名) 野飼の馬。

のけかぶど

(名) 兜の緒ゆるみて仰向になりたる事。

(保元)

のけぞる

仰反(自動四段) 仰向に反り返る。●仰向に

反りて倒るい。

のけくび

(名) 襟を後ろへ長く出して着る事。●ぬき

ねもん。(枕)

のけざまに

(副) 仰向に。

のぶ

延。伸(自動上二段) 長くなる。●延引する。●廣

がる。

のぶ

延。伸(他動下二段) 長くする。●延引さする。●

廣ぐる。

のぶ

述。陳(他動下二段) 委細を語る。●陳述する。

のぶだう

野葡萄(名) 草の名。蔓生にして葡萄に似

たる小さき實を結ぶもの。●犬葡萄。

のぶかに

窺深に(副) 矢の深く立つ有様。○謡曲「馬

の太腹のぶかに射させて」

のぶく

野服(名) 武家にて野袴、ぶつさき羽織の装ひ。

●野装束。

のぶし

野臥。野伏(名) 「一」野に臥す事。又は其人。

「二」佛名の時の僧の稱へ。歷代編年集成に

曰く「承和五年。御佛名を行はしむ。而して僧一口不足の處。一人の僧内野の芝の上

に臥す。暫時此僧を召し。畢りて野伏さ號

す」「三」野に臥し居る乞食。「四」山伏の一

名。

のぶすま

のこひの

野奈(名) 獸の名。鼯鼠の一名。
拭篋(名) 矢の一種。白篋を赤漆にて薄く塗
りたる矢。

のこり

のこりおほし

殘(名) 殘る事。●殘りたる物。●あまりもの。
殘多(形。形狀言ク活) 心殘りのする。●
遺念なる。●遺憾なる。

のこりのきく

殘菊(名) 冬になるまで咲き殘る菊。●
ざんざく。

のこりしね

殘稻(名) 抄 白米の中に殘りたる粃。(和名)

のこる

殘(自動四段) あさに留まる。●餘りてある。

のこるかり

殘雁(名) 冬に爲りて渡る雁。●冬の雁。
●ざんがん。

のこんの

(形) 殘りのに同じ。○「殘んの雪」

のこふ

(他動四段) ぬぐふに同じ。

のこぎり

鋸(名) 木を挽き割る道具。鐵の薄板に齒を
付けたるもの。●のばぎり。

のこぎりば

鋸齒葉(名) 草木の葉の周邊の鋸の齒の如
きもの。

のこす

遺。殘(他動四段) 「一」殘らす。●餘す。「二」

其物を置きて去る。

のさばる

のさき

(自動四段) 威張り廣がる。
荷前(名) 諸國より朝廷に貢物として納め來る
新穀の最初の荷。○萬葉「東人ののさきの
筥の」

のさきのつかひ

荷前使(名) 荷前の新穀を奉り給ふ使
の意。○十二月に吉日を撰びて十陵(御歷
代の天皇および今上の御父母等の諸陵)八
墓(今上外戚の御祖父母祖先等の諸墓)に差
遣はさるゝ奉幣使。

のき

のき

のきは

軒(名) 柱より外に斜に垂れたる屋根。

のき

芒(名) 麥又は稻の穂の毛の如きもの。

のき

のきはん

軒端(名) 軒の下端。
(名) ノ木偏の意。○漢字、稻、利、移、等の左
の部分。

のきく

野菊(名) 草の名。野生にて嫁菜に似たる花さ
くもの。

のめる

のめす

(自動四段) 前に倒るゝ。●すべる。
(他動上二段) のめらしむる。●倒す。

のみ

盥(名) 盥の名。夏、人體に附きて血をすふもの。
鑿(名) 木工の道具。木を鑿つに用ふるもの。

のみ

飲(名) 飲む事。

のみ

(後) ばかり。●だけ。

のみくひ

蚤喰(名) 蚤の刺したる痕。

のみくひ

飲食(名) 飲む事と食ふ事と。●いんしょく。

のみくち

飲口(名) 〔一〕樽より酒、醬油など流れ出で

しむる口。〔二〕酒飲み。

のみぐすり

飲藥(名) 服用する藥。●内用藥。

のみこむ

吞込(名) 〔一〕物を吞みて咽に入る。〔二〕

事を理解する。●合點する。

のみこみ

(名) 吞込理解する力。●會得。●合點。○

「のみこみのわるき人」

のみさし

(名) のみかけ。●飲み残し。

のみもの

飲物(名) 飲むべき液體の總名。●飲料。

のし

熨斗(名) 〔一〕火を入れて衣服の皺を熨す器。●

火のし(和名抄) 〔二〕熨斗鮑に同じ。〔三〕

紙を小さく折りて熨斗鮑の細片を包み込みたるもの。贈り物などに必らず添ふるものなり。

のじ

(名) 虹に同じ。(萬葉東歌)

のしろ

篋代(名) 襪の中子の矢竹に入りたる部分。

のしやシヨウ

野装束(名) 野服に同じ。

のしあはび

熨斗鮑(名) 鮑の肉を薄く切り長く熨して

乾したるもの。●のし。●長熨斗。●打鮑。

●長鮑。……祝儀に用ふるもの。

のじゅく

野宿(名) 野中に宿る事。●露宿。

のしめ

熨斗目(名) 腰の處に縞を織り出だしたる紋附

地の絹織物。武家時代社袴を着る時に用ひたり。

のしもち

(名) 切餅とする爲に薄く延ばしたる餅。

のび

野火(名) 野を焼く火。●野の火事。

のびる

野蒜(名) 草の名。蒜に同じ。

のびやか

丈のよく伸びたる有様(形)のびやかなる。(副)のびやかに。

のもり

野守(名) 野を守る番人。

のもりのかがみ

野守鏡(名) 野中の溜り水。……奥儀

抄に曰く「昔雄略天皇狩し給ひけるに御鷹

の失せにければ野守を召して尋ねて參らせよと仰せられけるに。畏まりて地を守らへ

て。御鷹は彼木の上に侍りて申しければ。

地を守りては如何にかくは申すぞと問はれ

ければ。前なる山水を指して。此水にうつ

りて見え侍りて申しければ。それより云ひ

のもせ

始めたるなり」

野も狭き程。●野一ぱい。(形)一のもせの。

(副)一のもせに。○拾玉集「秋くればなへ

て野もせに露しげし我袖の上は頃も定め

す」

のせ

鶺鴒(名) 鳥の名。鷹の一種。(和名抄)

のせり

野芹(名)

自然生の芹。

のせもち

能勢餅(名)

餅の一種。昔、攝津の國能勢郡

木代村に門太夫といふものあり。毎年十月

亥の子の餅を禁裏へ献るを例させり。之を

能勢餅といふ。

のす

載(他動下二段)

乗らしむる。●記載する。

のす

伸(他動四段)

伸ばす。

のす

(自動四段)

高く登り行く。○「風がのす」

のす

(副)

なすに同じ。如く。○萬葉東歌「利根川の

川瀬も知らずたゞ渡り波にあふのすあへる

君かも」

のすり

野摺(名)

秋の野なごを摺り付けたる装束の模

様。

のすゑ

野末(名)

野の末。●野の果。●末野。

